

コロナ禍が人類にもたらしたもの

2020年1月30日、世界保健機関は新型コロナウイルス肺炎の流行について「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言した。その後も全世界的に感染拡大が続き人類史に残るパンデミックとなっている。日本では4～5月に全国を挙げて外出自粛や休校・休業などに取り組んだことで感染爆発は抑え込んだものの、第二波への懸念は強く、人々はウイルスとの共存を前提にした「新しい生活様式」の実践を求められている。

コロナ禍は世界のあり様と人々の生活に大きな変化をもたらした。人と人の接触を物理的に遮断する以外に感染拡大を防ぐ手段がないため、国内外の自由な人の移動は大きく制限され、世界経済の成長の源泉となっていたグローバリゼーションは頓挫を余儀なくされた。さらに長期的にみて、原始の昔から今日まで、他者とコミュニケーションをとって社会を構築し、それを高度化させることで文明を発展させてきた人類にとって、生命線ともいえるコミュニケーションを自粛せざるを得ない大きな挫折の経験となった。

人類は、この試練をどのように乗り越えるのであろうか。脚光を浴びているのはオンラインによるコミュニケーションへの切替えである。デジタル技術の急速な発達に寄与して、商談や打合せ・会議などのビジネス、セミナーやシンポジウムなどの学術・討論、大学の講義まで一斉にオンラインが主流の世界に切り替わった。政府はこの流れを生産性向上に資するとして推し進める方針で、7月3日の未来投資会議において、オンラインによる在宅勤務を前提とした多様な働き方のルール整備や宅配向け自動配送ロボットの開発等を柱とする「新たな成長戦略の素案」を取りまとめた。

この勢いで進んだ場合、いずれビジネスシーンから表敬訪問や出張といった行動様式が廃れていきそうである。さらに、文化や趣味・エンターテインメントの世界までもオンライン化やバーチャル化が進行しつつあり、私たちはいま戸外にほとんど出ることなく自宅で仕事や生活ができる時代の入り口に立っているように思われる。

人類の発展の歴史は科学の進歩による苦役からの解放の歩みともいえ、オンライン化は人が移動にかけてきた時間やコストの削減の観点からは進歩と呼べよう。ただし、AIやロボットではない人は、効率性だけで幸福度を測れない複雑性を持った生身の存在である。苦労し手間をかけてこそ得られる達成感、バーチャルの世界では体験できない現実の世界の美しさと厳しさ、仲間と同じ場所で人生の同じ時を分かち合っている実感といった効率性の対極にあるものも、人が生きていくためには不可欠である。私たちの心の中で、そうしたリアルな価値はむしろ高まっているのではないだろうか。

コロナ禍は、グローバリゼーションの頓挫だけでなく、人口の都市への過度な集中の弊害や広がった地域間・世代間の意識のギャップ、深刻化している格差や差別の問題など、現代社会の様々な矛盾やひずみを白日の下にさらした。これらは経済成長や効率性重視の考え方では解決できない課題である。私たちは、持続可能性（サステナビリティ）と人間性（ヒューマニティ）の視座をしっかりとってこれらの課題に対処し、調和のとれた新しい社会のあり方を考えていかなければならない。

（株）農林中金総合研究所 代表取締役専務 柳田 茂・やなぎだ しげる）